

コート・ジボワール：「奇蹟」のあとのディウロ事件

著者	原口 武彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1985-09
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008813

コート・ジボワール

●「奇蹟」のあとのディウロ事件 ●

●原口武彦●

◀新興都市アビジャン

去る5月、東京都は世界の22の大都市の「首長」を東京に招き、「世界大都市サミット会議」を開催した。北京、バンコック、ニューヨーク、モスクワ、パリ、ロンドンなどアジア、欧米の大都市に伍して、サハラ以南のアフリカからは、唯一、西アフリカのコート・ジボワールのアビジャン市が招かれていた。

今日、アビジャン市の人口は約220万（1984年）ということであるから、国際的規準からすれば、さほど大きな都市とはいえない。事実、サハラ以南のアフリカでもたとえば、ナイジェリアの首都ラゴス（400～500万）、ザイールの首都キンシャサ（240万）など、人口の規模からすればアビジャンをしのぐ大都市が存在する。しかし、近年、急激に膨張してきた新興都市としては、その成長テンポの早さにおいて他に抜きんできている。1934年、この地に植民地総督府が移されたとき、アビジャンは人口わずか1万数千人の漁村にすぎなかった。アビジャンの急成長が始まったのは、1960年のコート・ジボワールの独立前後からである。1950年代後半から、70年代末までコート・ジボワール経済は、周辺諸国の停滞を尻目に「奇蹟」的高度成長を継続してきたが、アビジャン市はこの繁栄の成果を集中的に吸収し、急激に膨張してきた。したがってアビジャン市は第三世界の新興都市が当面するさまざまな問題、矛盾をかかえており、都市問題の討論の素材にはことかかない。おそらくは、そ

のような意味合いから選択され、またサハラ以南のアフリカから招かれた唯一の都市、その市長ということで、世界大都市サミット会議に色どりをそえるものと主催者側は期待していたはずである。

ところが1年以上をかけて準備がすすめられてきた、この会議の開催が間近にせまった本年の3月、訪日が予定されていたアビジャン市のディウロ市長が政治的スキャンダルに巻きこまれ失踪してしまうという事件が発生した。日本側関係者の当惑ぶりは想像に難くない。会議には市長代理としてE・A・バスク副市長が出席して体裁は何とかととのえたが、次期大統領候補のうわさもあつた大物市長ディウロ氏に比べれば話題性にも乏しく、事実、この「サミット」の模様をもっとも大きく取り上げていた毎日新聞でも、アビジャン市は西暦2010年には人口1000万をこえるスピードで人口増加しつつある新興都市としてだけ簡単に紹介されたのにとどまった。

5月下旬のさわやかな季節の数日間、世界各地から集まった他の首長たちが「東京の休日」を味わっていた頃、それに加わっているはずであつたディウロ氏は、ヨーロッパのどこかの都市の片隅でひっそりと華やかであつたアビジャン市長時代を思いおこしていたことであろう。このことは、現代世界におけるアフリカを象徴している風景のようにおもえる。東京都のサミット準備関係者たちと同じように、さまざまな面でのアフリカとの接触において、当惑させられた経験をもつ非ア

激な膨張のために、都市機能が能力的に限界に達し、麻痺寸前の状況にあること、などを提案理由としてあげ、この遷都案を圧倒的多数で可決した。同時に少数の反対者の声は、いずれも選出選挙区の地元民に不信を表明されたことによって、政治的圧力をかけられ、表面から消えていった。

このような経過を経て、ディウロ氏はそれまで難航していたウフェ・ボワニの後継者候補として、がぜん、頭角をあらわしてきた。今回の事件を現地から国際的に報じた『ジュンヌ・アフリック』誌 (No.1266, 1985年4月10日号) のS・ディアロ同誌特派員は、このコート・ジボワール政界におけるディウロ氏台頭の過程を「ディウロ現象」と名付けている。

🐏 大山鳴動「羊」一匹

この「ディウロ現象」の雲行きがあやしくなり、色調が暗転しはじめたのは、昨年の秋頃からである。国立農業開発銀行(BNDA)と、ディウロ市長が経営する貿易商社 COGEXIM 社との間で、同社に対する貸付金の返済をめぐる争いが発生したのである。両者の間の話し合いがつかず、今年に入って BNDA 側は、この一件をアビジャン第一審裁判所に提訴したことをきっかけに、ことは政治的様相を帯びて拡大していった(あるいは現在の時点でもふりかえると、当初からその要素を内包していたといえるかもしれない)。

3月18日、裁判所は BNDA が請求した160億 CFA フランの貸付金返済のうち、70億 CFA フランの即時返済を COGEXIM 社に命じる判決を下した。この判決は、すでに政治スキャンダル化しつつあったこの事件を民事の枠内にとどめ収拾しようとしたものであった。そこで裁判所の前にたむろしていたディウロ氏の支持者たちは「勝訴」の歓声をあげたという。

しかし、BNDA 側は上訴し、翌々日20日には、コート・ジボワール民主党の最高決議機関である政治局は、この問題を審議し、この判決を公然と批判した。そして政治局がディウロ氏の国会議員としての司法権に対する不逮捕特権を剝奪するよう要求するコミュニケを発表したことによって、ディウロ氏の政治的敗北はあきらかになった。

政治局のコミュニケをうけて、国会が休会中の場合に法制的な権限をもつコナン・ベディエ国会議長が主宰する委員会は、25日、ディウロ市長の不逮捕特権を剝奪した。

翌26日、アビジャン市の高級住宅街ココデイの一角、ラギューン(潟湖)を見おろすディウロ市長邸に逮捕状をもって検察当局がのりこんだとき、ディウロ市長が数日前から閉じこもっていたはずの自室はもぬけのからであった。『ジュンヌ・アフリック』誌の報ずるところでは、係官がノックしても返事のない彼の居室のドアをこじあけて中に入ってみると、ディウロ氏の姿はそこにはなく、すでに数日前に首をしめ殺されたとおもわれる一匹の羊の死体が横たわっていたという(ちなみに羊は、ウフェ・ボワニ大統領を象徴する動物である)。

ディウロ市長は、判決が言い渡された翌日の19日、アビジャン市から20キロメートル余りのバンジュール市に住む友人宅を訪れたのちココデイの自邸にもどり、しばらく1人になりたいといいのこして自室に閉じこもったというのが、すでに数日前からディウロ邸を監視していた警察側が確認しているディウロ氏の最後の姿である。

おそらくこの日、翌日に開催される政治局会議の結論を予知したディウロ氏は、自らの政治的敗北を認め、投獄さらには生命の危険を感じて、監視の目をのがれてラギューンづたいに逃亡をはかったものとおもわれる。そして陸路ないしは水路で国境を越え隣国ガーナに入り、同国のアクラ空

港からロンドンを經由してヨーロッパ(おそらくベルギー)入りしたものと推測されている。

すでに警察の監視下にあった自邸から、国境を越え、ヨーロッパにまで逃亡するという離れ業をディウロ氏がやってのけたということは、ディウロ氏がそれまでに培ってきた内外各方面にわたる人脈の広さ、実力の証左ともいえよう。他方、この事実を知ったウフェ・ボワニは、警察当局の無能さに激怒したといわれている。

ヨーロッパ入りしたディウロ市長は、この事件の弁護をフランス人弁護士、J・ベルジェ氏に依頼した。同弁護士はナチの指導者であったクラス・バルビの弁護を担当したことなどでも知られる著名な特異な立場の弁護士であり、同氏がコート・ジボワールの高度な政治問題にまで発展したこのディウロ氏の弁護をひきうけたことを知ったフランス政府筋は、不安の色をかくさなかったと伝えられている。

しかし、J・ベルジェ氏は即刻、行動を開始し、同じ仏語圏西アフリカのトーゴにまず飛び、同国のエヤデマ大統領の専用機を借りて同国のラクレ内務大臣を同行して3月30日にアビジャン入りし、2日間にわたって同氏は、ウフェ・ボワニ大統領とこの事件について協議している。ディウロ氏の依頼をうけたとはいえ、民間の一弁護士がこのようなかたちで政治に介入してくる過程は、外部者には理解しにくいのが、とにかく、その話し合いでは、ディウロ氏の生命・人権の保障が同氏の主たる要求事項であったといわれている。

この事件が、法律的にあるいは政治的にどのようなかたちで收拾されるにしろ、現体制のもとでは、少なくともディウロ氏の政治的失脚は確定的であるようにおもわれる。この政治的失脚で、一応完結したかにみえる「ディウロ現象」とは、コート・ジボワールにとって何を意味していたので

あろうか。

☞ 「奇蹟」の落し子

彗星のごとく登場したディウロ氏の政治的台頭の過程をふりかえってみると、彼はコート・ジボワールの高度成長の落し子であったようにおもえてくる。彼の政治的台頭の過程は、彼自身の蓄財の過程でもあった。今回の事件の発端となったCOGEXIM社は、コート・ジボワールの主要輸出産品、コーヒー、ココアを農民から買付け、加工し輸出する貿易商社であった。この会社をディウロ氏が創立したのは1977年で、この年はコーヒー、ココアとも国際価格が空前の高騰を示した年であった。そしてBNDAから借り入れ返済不能となった160億CFAフランは、1980～83年の間に、買付資金として借り入れたものであった。この時期、コーヒー、ココアの国際価格は反転し暴落した。コート・ジボワールのコーヒー、ココア輸出については、価格安定金庫が介入し価格規制を行なっているため、国際価格の動向がコート・ジボワール国内にあって投機的活動をひきおこす可能性は抑制されているが、しかし、コーヒー、ココアの国際価格の高騰がつづいていけば、ディウロ氏のCOGEXIM社はその波にのり、企業的成功を収めていた可能性は十分にある。現に今回の事件も、貸付金の担保物件であった同社のコーヒー、ココアの滞貨だけがいつのまにか消え、貸付金は返済されないままであったことが発覚したことに端を発しているのである。

ディウロ氏は、COGEXIM社のほかに不動産業、フランス系企業から買い取ったパイナップル農園とその缶詰め工場、商業銀行(Banque Atlantique)など、事業を拡大してきた。これらは70年代の経済ブームにのり、彼の政治的台頭と併行して拡大してきたものである。彼の経済力は政治

力の、彼の政治力は経済力の増強に、相乗的に寄与し、次期大統領候補に目されるまでに彼の政治・経済的地位は急上昇していったのである。

ディウロ氏の台頭にみられる政経の癒着は、おそらく彼に限ったことではあるまい。『ジュヌ・アフリック』誌は「わが国の政治指導者のなかで、われわれを踏み台にして蓄財してこなかったものがあるだろうか。しかしディウロ氏は少なくとも、その分け前をわれわれ庶民にわかち与えた」という巷のディウロ氏支持の声を伝えている。しかし、そのような意味で庶民のなかにディウロ氏は幅広い支持をえていたにしても、それゆえにその分け前をほどこす富の源泉を失った彼は、その支持者を失っていくにちがいない。

◀後継者はいずこ？

かくして、ウフェ・ボワニはまたしても有力な後継者候補を失った。本年10月末に予定される大

統領選に、ウフェ・ボワニが健康がゆるすかぎり80歳の老齢をおして六度、立候補することは、ほぼ確定的であろう。その際、正統の後継者を意味する副大統領候補を指名できるかどうか、それがコート・ジボワール政治の最大の課題であるといえよう。

ディウロ氏が提案したヤムスクロ遷都は、コート・ジボワールにとって正しい選択であったのだろうか。今や国父的地位にあるウフェ・ボワニの生地ヤムスクロに、コート・ジボワールの政治的中心の地位を与える必要はもはやなく、聖都の称号を与えるべきではなかったか。政治の論理だけで選ばれた後継者が、あのヤムスクロの宮殿に居を構えることは、イメージしにくいのではなからうか。あの宮殿の豪壮さは、将来の館の主選びの困難さを象徴しているようだ。

(はらぐち・たけひこ／調査研究部)